

## 東京シンフォニア 『Symphonies for Strings』シリーズについて

### はじめに

東京シンフォニアは、3月14日から、銀座の王子ホールにおいて『Symphonies for Strings』弦楽のための交響曲 シャンパンコンサートシリーズを開始することになりました。

### 音楽監督ロバート ライカー

日本のクラシック音楽は、テクニク的には大変すばらしいものがあるのですが、なんとなく近づきがたいイメージがあります。

マエストロ ライカーが日本へ来た時、トップクラスの奏者による演奏でさえ、もっとあたたかく、楽しいものにする事ができると感じました。

彼の音楽の基本に対するの画期的なアプローチは、次の3つです。

まずは、演奏者： マエストロは、私たち東京シンフォニアの奏者を大切にします。プロとしての厳しい水準を要求すると同時に、楽しんで演奏してもらいたいと思っています。マエストロによる編曲は、一人一人の奏者をソリストにします。単に音楽を作るマシンの、部品のひとつとして扱うようなことはありません。オーケストラの創立者としても知られ、そのビジョンは、演奏者を通して聴く人へ伝えられます。彼は、19人の演奏者から、豊かな音の綾を織り出し、ひとつの新しい楽器へと発展させました。最初にテクニクから始め、表現力をつけ、解釈を加え、カリスマ性をもって、音符を音楽へと変えていきます。

2つ目は、プログラム用曲目：編曲をすることによって、プログラムのメインとなり得る楽曲に新しい息吹を与えます。そして、弦楽オーケストラをひとつの新しい楽器として演奏します。

3つ目は、聴き手： マエストロのあたたかく、気さくな音楽づくりによって、演奏者にとっても聴き手にとっても、コンサートは楽しいものになります。楽しいだけでなく、あくまでも水準は高いものです。

コンサートには次のような種類があります。

□ 「とっても楽しい」ディナーコンサートシリーズ。有楽町の日本外国特派員協会を会場とします。それぞれの国をテーマとした食事と音楽が、1品、1曲ずつ交互に提供されます。長年の音楽ファンも、初めて聴く人にも親しみやすいコンサートです。

- 正統派の『Symphonies for Strings』シリーズ。銀座4丁目の王子ホールにおけるシャンパンコンサートシリーズです。コンサートホールでほとんど耳にすることがない優れた弦楽五重奏曲を、弦楽オーケストラ用に編曲しました。耳の肥えた人にも、初心者にも聴いてもらいたいトップレベルのコンサートシリーズです。
- スペシャルイベントとしては、モーツァルトバースデーセレナーデ、ロシア大使館大ホールにおけるサマーセレナーデ、在日英国商工会議所記念行事の演奏会などがあります。
- 学校の音楽鑑賞教室用のプログラムもあります。もともと米国の教育委員会向けに開発されたもので、好評を得ています。

### マエストロ ライカーの音楽観

音は音楽の始まりです。マエストロが東京シンフォニアの構想を抱いたとき、コストパフォーマンスが高く、最大限に豊かな音を作り出したいと思いました。そのために次の二つのコンセプトを打ち出しました。

まず、マネジメントの面からは、心理学のグループダイナミクス説を取り入れました。一般的に、グループとして、一人のメンバーが、自分がグループのために貢献していると実感できる人数は、5人が最大です。(それ以上になると、グループは、中核になる人たちと、それ以外の人たちに分離してしまいます)。マエストロは、すべての演奏者に、自分がオーケストラにエネルギーを与える重要な存在なのだという事を感じてほしかったのです。そこで、パートの最大人数を5人としました。

次にハーモニーの点では、音の科学を取り入れました。上音は、基礎となるベースから派生します。ベースは音の構造の中心となるので、アンサンブルの真中に配置し、高い音を両側にバランスよく配置しました。

東京シンフォニアでは、第一ヴァイオリンと第二ヴァイオリンが、指揮者ををはさんで両側に配置されています。これは、第二ヴァイオリン奏者の力を信頼することの証です。何世紀もの間、熟練度の、より少ない奏者が、第二ヴァイオリンパートに配置されてきました。第一ヴァイオリンの隣に座り、その影で、安全に演奏してきました。しかし、これでは第二ヴァイオリンの音が聴こえてきませんし、バランスの取れた音のつながりがつくれません。オペラシーティングと呼ばれるものがこの問題を解決します。が、第二ヴァイオリン奏者にとっては、対面にいる第一ヴァイオリンと同等に弾くのは大変なことです。マエストロはこの方法を選び、第二ヴァイオリンをステージ向かって右の全面に座らせ、その結果として、第二ヴァイオリン奏者にとっても大きな誇りを持っています。

次に考えたのは、ヴィオラとチェロのシーティングです。よく考えた上で、ヴィオラを、向かって左側の第一ヴァイオリンの隣に配置しました。トスカニーニのシーティングです。ヴィオラの音は、低い音と高い音の橋渡しとなり、全体の音を融合させ、継ぎ目のないひとつの音をつくります。ヴァイオリンと同様に、ヴィオラのf字孔が客席に向くように座るので、とても聴きやすい位置になります。そのうえ、ヴィオラの音は第一ヴァイオリンの音をやわらげてあたたかくします。チェロも同様に、第二ヴァイオリンの音をあたたかくする役割を持っています。

各パートのサイズは、やはりきちんとした理由から、正確にバランスが取れています。第一ヴァイオリン5、第二ヴァイオリン5、ヴィオラ4、チェロ3、コントラバス2。すべて、バランスの問題です。各パートのバランスが取れていれば、音は自然と合います。音が合えば、和音が響きます。和音が響けば、美しい音づくりができます。美しい音作りができれば、オーケストラが有名になります。

マエストロが、最初に19人編成の東京シンフォニアのリハーサルをした時、各パートのトップ奏者を、できるだけ小さい輪になる配置にしたいと考えました。というのは、シンフォニーオーケストラの場合には大きい輪にならざるを得ないでしょうが、私たちの場合は、弦楽四重奏のように近くに寄ってほしいと考えました。そこで、トップ奏者を一人で座らせて、五重奏のように配置し、各パートを代表して、他のパートとコミュニケーションをとるようにしました。このシーティングは、これまでの経験では効果を奏していて、東京シンフォニアのトレードマークとなっています。

マエストロは、一人一人の奏者をとても大切にします。ロジャー ブルツキンが以前コメントしたように、東京シンフォニアでは、全員がソリストです。

オーケストラが美しいサウンドを持っているならば、それを表現するのにふさわしい演奏曲目があるべきです。ところが現実には、管楽器がオーケストラに加わり、カラフルでドラマチックな要素をプラスするようになってから、作曲家にとって、弦楽オーケストラ作品を書くことは二の次になってしまいました。よく演奏される協奏曲、ソナタ、四重奏曲、交響曲、交響詩には、たくさん数があります。そして、その中から、プログラム構成として、30分またはそれ以上のメインの曲が選ばれます。しかしながら、今、会場にいらっしゃる方で、30分の長さの弦楽オーケストラ曲を挙げられる方はいらっしゃいますか？

プログラムのメインになるような弦楽オーケストラ用の楽曲が不足していることから、マエストロは、室内楽曲で、弦楽オーケストラに編曲できるものがないかと考えました。これにはいくつかの先例があります。シェーンベルクの『清められた夜』。シューベルトの『死と乙女』、これはマーラーがオーケストレーションをするつもりだったようです。そしてブリテンの『シンプルシンフォニー』、原曲は弦楽四重奏曲でした。

マエストロは、ブルックナーが、音を大きなかたまりとしてよく使うことから、編曲できる曲があるのでは

ないかと思いました。調べてみると実際に、ブルックナーの弦楽五重奏曲で40分という長さの曲を見つけました。偉大な楽曲であるのに、演奏されていません。これはまったく幸運な出だしでした。続いて、弦楽五重奏曲を数曲を見つけました。どれもが、優れた曲であるのに、楽器編成のためにあまり演奏されることがなかった曲ばかりです。音楽家の夢である、ベートーヴェン、ブラームス、ドヴォルザーク、メンデルスゾーン、モーツァルト、シューベルトといった作曲家の作品です。

このプロジェクト、「The Symphonies for Strings」には二倍の効果があります。まず、弦楽オーケストラのためのレパートリー曲をたくさん増やすこと。その次に、編曲をして演奏されなければ、人々の耳に届くチャンスがない曲をコンサートホールで演奏することです。

マエストロのオーケストレーションでは、メロディーを自由に二つのヴァイオリンパートに行き来させ、アンサンブルの中で、二つのヴァイオリンパートをほとんど同じくらいの比率で使います。このエネルギーの転スファアは、聴き手によく伝わっています。テクニックを知ることなく、聴く人は、私たちの演奏がエネルギーであると言ってくれますし、両側から交互に音が生まれてくるエキサイティングな演奏を賞賛してくれます。

このような理由から、私たちは、昔ながらのスタイルのオーケストレーションをあまり演奏しないようになってきました。コンセプトの枠にこだわり過ぎていますし、現代では演奏者の実力が向上しているので、ふさわしくないからです。編曲するのに適切な曲をみつけて、私たちは、東京シンフォニア独自のオリジナル編曲版を演奏することが多くなっています。それは、東京シンフォニアの演奏者が優れているからこそできることですし、優れた演奏者にマッチした音楽的なコンセプトがふさわしいのです。

## 王子ホール

王子ホールは、ファーストクラスのコンサートホールで、エレガントな都心の、絶好の場所に位置しています。心地良いホールのサイズは、弦楽オーケストラのコンサートのために完璧なものです。

王子ホールは、日本でもっとも歴史の古い製紙会社、王子製紙株式会社が、クラシック音楽専用にて建てたコンサートホールです。最高の音響とエレガントなデザインのためにすべての力が注がれ、会社の名前を代表するホールとなっています。19人の東京シンフォニアの演奏に理想的なサイズです。

## スポンサー

これまでずっと、私たちは、財政的に緊迫した状態で運営してきました。チケットの売上だけでは、演奏料や、ほかの経費をカバーするのにじゅうぶんではありません。

このたび、第一号サポーターに名乗りをあげてくれたのが、千駄ヶ谷日本語教育研究所、理事長 吉岡正毅氏 (<http://www.jp-sji.org/sji> 英語 english/index.html)。また、新生銀行は、記者会見の会場を提供、ディナーコンサートに50名の団体参加などのかたちで、大きな力添えをしてくれています。そして、王子ホール『Symphonies for Strings』シリーズには、東京ブリティッシュクリニックがプラチナスポンサーとなってくれ、シリーズの実現可能となりました。

### 最後に

これまでご説明したことは、3年目に入った東京シンフォニアの演奏で実感していただけるはずです。日本の弦楽オーケストラをリードし、チャレンジと発展の年にしたいと思います。

### プレスキット

- (1) チラシ3月14日
- (2) チラシ6月13日
- (3) チラシ9月19日
- (4) チラシ12月12日
- (5) CD(チャイコフスキー『四季』)
- (6) 写真
- (7) 3月14日御招待状
- (8) Symphonies for Stringsプロモ
- (9) 東京シンフォニアプロモ
- (10) ベートーヴェンスコア
- (11) 東京ブリティッシュクリニックパンフレット